

【日々の振る舞いに懺悔し、 法華經の実践に精進す】

檀信徒皆様のお気持ちが一つになつて、ついに先月二十二日【三十番神様】が真成寺の本堂に安置されました。一寺院の仏様の開眼式なんていうのは、本当に一生に一度あるかないかという大事業だと思えますが、当日は悪天候にも関わらず沢山の参詣者が集い、歴史の証人になつて頂きましたこと、寺族一同、心より感謝しあげます。また【三十番神様】も大変お慶びになられたのではなからうかと思えます。

当日、ご祈禱に参集して頂きました有志僧侶方いわく「この様に个性的な三十番神様は今まで拝見したことが無い」と一様に感想を述べていました。どうぞ檀信徒の皆様も、今後【三十番神様】を祀るお寺に詣でました折には、真成寺の【三十番神様】と見比べて頂ければ、その意味がご理解頂けるものと思えます。この度、製作して頂きました仏師の馬淵憲峰氏には、二年間という歳月を

費やして頂き、本当に魂の籠もった仏像を彫り上げて頂きましたことを、この場をお借りして御礼申しあげます。有り難うございました。

また、【三十番神様】奉安に伴い、真心を込めて一緒にお迎え下さいました檀信徒の皆様方にも心よりの感謝を申しあげます。本当に、有り難うございました。

ところで、仏像というものは目に見える形にしなければ、お護り頂けないのかと言えば、そうではありませんよね。実は、私達が気付かないうちから、神仏様は私達を見守つて下さつておいでになります。神仏様と私達の関係は、【如来壽量品第十六】に説かれるように、親子のような関係なのです。神仏様が親、私達が子供。私達（子供）がお願いする前から、神仏様（親）は無償の愛情で、私達の為に救いの手をさしのべて下さつておられるという事になります。では、なんの為に私達に救いの手を差し伸べられるのでしょうか？お釈迦様はこれを一言で「私達を仏様にするため」と仰つておられます。神仏様は、私達皆の成仏（仏に成ること）を願ひ、その為に【法華經】を説き続けられておられるというのです。お釈迦様は自分一人だけでなく、全て

の人々を、共に、仏様の世界へ導き入りたいという慈悲の心で教えを説かれたというのです。つまり神仏様は、生きとし生ける者の全てを、苦しみ・悲しみ・悩みから解き放ち、真の幸福を得る事が出来る様にと教えを説かれたというのです。

そんなお釈迦様が本当に教え弘めたかったのが【法華經】であるとされます。その【法華經】には、「十方仏土の中には 唯一乗（法華經）の法（おしえ）のみありて二も無く、また三も無し」と述べられ、私達皆が【法華經】の教えを実践するところに、成仏がかなうとし、他の諸經（おしえ）は、嘘ではなく、【法華經】の実践に向かわせる為の方便だった、と明言されました。たしかに私達からしてみれば、神仏様は数知れず存在しておられ、どの神仏様を信したらよいのか？迷うばかりですよね。そこでお釈迦様は、【法華經】の教えを説き、【法華經】を実践してもらう事によつて、私達の成仏の道が一つに統一され、唯一無二の成仏への道が確立されることを示されました。

【法華經】見宝塔品第十一には、全ての神仏様は釈迦牟尼仏の分身である事が説かれ、如来壽量品第十六の釈迦

牟尼仏が、全ての仏のいわば本体であり、全ての神仏様はその分身であるとされています。かくして、【法華經】に説かれる久遠実成の釈迦牟尼仏（神仏様）を信じて帰依（きえ 南無）すれば、私達は皆、神仏様の智慧と慈悲の守護を頂く事が出来る断言されているのです。

帰依（きえ 南無）するとは…私達は日々の生活の中で知らずのうちにおかしてしまっている罪に対して懺悔しなければいけません。懺悔とはまさに、神仏様への信、妙法蓮華經への絶対的信に他ならないのです。自分自身を振り返つてみて、自分は罪を犯していないと言ひ切れる人がいるでしょうか？私達が食べる食事は他の生命です。直接手をかけていなくても、また植物であっても次世代を生む大事な種を、私達は自らが生きるために頂いている。これもまた大きな罪と言えるでしょう。そんな自身を省みた時、懺悔ということが他人事ではなく自身の身にとつていかに大事かが理解できます。懺悔は神仏様への信、【法華經】への信という事に繋がります。信というの、神仏様の心を我が心として頂く事であり、神仏様の手足とな

ること、すなわち【法華經】流布（るふ）教え弘める）の担い手になるという事に他なりません。【法華經】を身をもって弘め伝える、つまり人の為役に役立つというプラスの行為によって、罪というマイナスが、**自ずと消えていくのです。**

また日蓮聖人は、【法華經】について、【二代の肝心は法華經、法華經の修行の肝心は不輕品にて候なり。不輕菩薩の人を敬いしは、いかなる事ぞ。教主釈尊の出世の本懐は人の振舞いにて候けるぞ（崇峻天皇御書）

|| 数多くの経文がありますが、その中で一番の中心は【法華經】である。そしてその【法華經】の修行の中心は、**常不輕菩薩**（じょうぶきょうぼさつ）の修行なのです。お釈迦様がこの世に現れた本当の目的は、人の振る舞いを正す事の中にあるのであって、つまりは常不輕菩薩のように人を敬う事である。それがお釈迦様の教えなのである【と喝破（かっぱ）されています。

ここに**ある常不輕菩薩**というのは、【法華經】の第二十章、【常不輕菩薩品第二十】に登場する菩薩様のことですが、彼は出会う人、出会う人に合掌をして「私はあなたを決

して軽んじません。あなたを敬います」と言っは、その相手の心の中に宿っている仏性（仏の心）に対して、合掌礼拝する人生を送られ、最後には成仏なされた菩薩様の事です。

自分さえ良ければそれで良いと考える人は、法華經を実践している人とは言えません。常不輕菩薩の振る舞い、即ち他人を輕蔑せず、敬いの心で相手に接すること。共に助け合う相互扶助の精神こそが法華經修行の肝心であり、自分の振る舞いを顧み、正しく行為こそが神仏様の願いであり、【法華經】の実践ということになります。

真成寺に安置されました【三十番神様】は、様々な担当がございます。私達人間にも様々な性質の人間が存在している様に、法華經守護の諸天善神様も様々おられます。このたび目に見える仏像という形で安置されました【三十番神様】をはじめ、本堂に祀られている【法華經】守護の諸天善神様の前で、私達の日々の振る舞いを顧み、懺悔する日々を送られます様に…。その懺悔の先に、**帰依する心が芽生え、いつしか常不輕菩薩の様な振る舞いができる自分に成長できますように**…。宮澤賢治という詩人は、【法華經】の大信者でした。その賢治の作品で有名な

『雨ニモマケズ』の中に、「デクノボウ」という表現が出て参りますが、まさに常不輕菩薩を言い表しています。「実るほど頭の下がる稲穂かな」。益々の精進をお誓い申しあげ、筆を置きたいと思ひます。

合掌

副住職 谷川寛敬

ちよつと一服

端午の節句の由来は？

端午（たんご）は**五節句**の一。端午の節句、菖蒲の節句とも呼ばれる。日本では端午の節句に男子の健やかな成長を祈願し各種の行事を行う風習があります。端午の日には**ちまき**や**柏餅**（かしわもち）を食べる風習もあります。ちまきを食べるのは、**中国戦国時代**の楚の詩人**屈原**の**命日**である五月五日に彼を慕う人々が彼が身を投げた**汨羅江**（へきらこう）にちまきを投げ入れて供養したこと、また、屈原

の亡骸を魚が食らわれないよう魚のえさとしたものがちまきの由来とされています。柏餅を食べる風習は日本独自のものです、**柏**は新芽が出るまで古い葉が落ちないことから「家系が絶えない」縁起物として広まっていったようです。中国語圏では、現在も屈原を助けるために船を出した故事にちなみ、龍船節として手漕舟（龍船）あるいはドラゴンボート）の競漕が行われています。**ヨモギ**（蓬、**中国語** 艾（アイ））または艾蒿（アイハオ）の束を魔よけとして戸口に飾る風習も、広く行なわれています。

